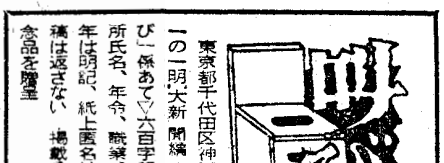

東京都千代田区神田駿河台一の一明大新聞編集部「叫び」係あて▽六百字程度▽住所氏名、年令、職業、学部学年は明記、紙上匿名は可▽原稿は返さない　掲載分には記念品を贈呈

問題の所存を明かにするために

虚学のヴェールに包まれ安穏としていた現行大学に対し、自からの身を血に染めて告発した全共闘Wに、唯一大学当局が応えたものは、国家権力との癒着による彼らの「力」の行使であった。全共闘運動のプロセスは、一方大学当局にとって、学内収拾（学内治安維持）を計ると同時に、それを背景としながら（パンフ「学内情況について」の配布など）大学改革路線を学内的に定着させることでもあった。「中間報告」を基調とする大学改革路線の表現するものは、権力の相対的優位性のまえに進行する権力側の大学再編に乗り遅れまいとする大学側の意志と、権力との関係において、相対的に独自な位置をより先きどりし形で確保せんがための、大学自からの作業に外ならない。

同時的に進行する権力側の大学再編とは、全社会的な帝国主義の再編の一環として、七〇年代の大学のあり方（①産業構造に見合った労働力の目的別養成②「自主技術」開発体制の確立③研究・教育体制の再編―大学における研究は「自主技術」開発の社会的要請に応えることが第一義となり、教育は「養成」と同義語となる④管理体制の整備強化）を根本から規定するものとしてある。

これらのことから、大学側が権力の大学再編に相対的に反発する様相（大学治安立法反対など）を呈しようとも、大学改革路線の本質は、大学内において、再編を担う主体の形成・結晶を行うものとして、さらには、そのイデオロギー形成を大学自からが引受けるものとして把握されなければならない。

「中間報告」―墓碑銘一「虚飾の精神構造」

〈非責任の論理〉と責ぬかれている「中間報告」は、五〇年代の大学の理念＝「市民的自由人形成」の大学を、再度「大学の理念」として提出して来る。このことは、大正リベラリズムの「近代信仰」と思想的「主体」の欠落を媒介とする現代社会に対する〈幻想〉を発想の基盤としているのである。私達は、かかる大正リベラリズムの善意的発想が現代社会の矛盾を隠蔽し、それが支配イデオロギーの一つの形態であることを指摘しなければならない。

そして、彼らが大学問題を「実践主体」である人間の問題〉としてではなく（そのことは、彼らが把握するような一般的〈人間〉の問題ではない）、「制度論」的にしか理解し得ない背景はここにある。即ち、私有財産と分業に基づくひとつの社会体制が、意識のたすけをかりて維持されるためには、「意識された存在」と、「現実のあるがままの存在」との分裂が必要とされる。そのことは、現実の社会関係そのものから生み出されて来るものであって、個人の意識とはかかわりなく、いかなる社会編成も個人の意識形態そのものをも再編せずにはおかないのである。そして、ブルジョア社会における〈意識〉は、行動や内的欲求からの分離、分裂として表われるのであり、そこにおける意識は抽象的意識として形造られる。その意識は、力を行使することも銘うたれる。例え、意識が行動と内的欲求と結びついたとしても、それ自身機械的なものでしかないのである。制度的改変を意図する彼らが、口にする人間の意識とは、抽象的意識のことであり、行動・内的欲求との全的結合の展開過程として語られているのではない。

認識の論理的構造が明かにされるためには「主体の論理」、その内的矛盾の展開過程がなによりも明かにされなければならない。にもかかわらず、「制度」の問題を先行させる彼らの論理には、「学問的営為」を行い、「科学」的思考を体現した自己自身の「主体」をとり結ぶということは、「実践主体」が全的にその「素材」の外的要因をも引受けるということを意味する。なぜならば、「中間報告」の論理構造が、「実践主体」を表象的「個」と本質としての、「存在」との間を未分化のまま認識して成り立っていることは前述したが、そのことは、「学問的営為」が「個」の（私的）展開でしかなく、対象が生み出す疎外の形態を意識することなく、「学問的営為」それ自身疎外の産物として表われて来ざるを得ないのが、現在の学問だからである。その限りでは、現実世界が疎外を生み出しその疎外によって、現実が何を疎外させているのかという認識は成立しないのである。まして「疎外の止揚」などという問題は出てくるはずもない。

かかる認識と、大学知識人の、「自己批判」とを抜きにして出される「中間報告」が、権力の問題や制度の問題を論じる根拠は何処にもない。言わずもがな、大学を逆転の歯車に乗せることなど許されない。

「中間報告」―墓碑銘三「背理の彼方に」

「中間報告」―（問題の根源）（大学教育の目標）、（大学と社会）の論理は、大正リベラリズムの具体的表現として、「近代信仰」に裏打ちされた「戦後民主主義」の倫理的解釈でしかないことを読みとる必要がある。そのことは、現代社会に対する幻想として現実世界が生み出す矛盾を本質として把握するのではなく、表象としての「個」（疎外された意識）の日常的次元における感性的表現としてあるのである。したがって、大学問題の本質が、「制度的問題」、「理念の充分な醸成」、「内実化の欠落」、「権力の介入」などにあるのではなく、大学の実体である「学問的営為」それ自身の疎外形態としてあるのであり、その「実践主体」の疎外として現出していることなど、彼らには理解出来得ないものとしてある。自己の「学問的営為」を「私的」領域に限るのであれば、「疎外」を問題として意識することもなく、制度的欠陥・不備を権力に責任転換することは難くない。戦後の大学制度に理念が無かったなどと「戯言」を吐く前に、それが鏡に映された己れの姿であることをおもい知るべきであろう。

「素材」の外的要因までをも引受けようとする「実践主体」は、全てに耐えて行かなければならないのである。即ち、「学問」の社会性として、「大学」の社会的存在から、実践主義が好むと好まざるとにかかわらず、素材と共に付随する全ゆる要因の責をも、学問は対象とすることを覚悟せねばならないのである。そのことから、学問の政治性、実践主体の政治性は、当初から意図されるものではなく、「素材」の生成過程から規定されたものとして付与されるものである。

去りゆくエセ・インテリゲンチャーの繰言を聞く必要は何処にもない。埋もれし地底からの痛恨の叫びは、自からの身を鮮血に染めることにかえられた。今度は、大学自からのドス黒い血を、その代償として求めなければならない。

鴻巣正和（政経学部四年）

味のアヴェニュー　コーヒー

心の中の全共闘運動

今や仰々しい検閲体制のもとで授業が再開されている。らく書きは残っていても教室内は闘争以前のように整理されている。まるで何事もなかったように。らく書きを読んでみると、全体的には何かの本からの引用が多く独創性に欠けているように思われる。そうしてみるとバリケード内での全共闘の学生の生活が、まだ日常性から脱皮できなかったのではないかと感じる。自分で感じたことを、そのまま素直に心の中から吐き出した時こそ、そこに書きも人に強く訴える力がでてくるだろう。

批判はいろいろ持っているが、バリケードの中に入って、自分をみつめ、社会や政治のことを考えバリケードを守り抜いてきた闘士は立派だと思う。全共闘運動が提起した問題は本質に迫るものを含んでいて、もやもやとしたものを胸に懐いているから自分にとって心情的に共鳴するところは多い。

わたしの友人のM君は、バリケードの中で必死に何かを求め続け佐藤訪米阻止の街頭闘争に出ていった。いまはクサイ飯をくらっていることであろう。安田講堂の時計台で最後の抵抗を試みた学生がインターを歌いながら流した涙、その涙の意味がバリケードの中で暮らすうちにわかりかけてきたと語っていた彼、彼も落書きを残している。日常性に埋没している者には到底解じることのできない、〝若さと情熱〟がそこにはあるはずである。

彼は多くの闘士とともに街頭にでて機動隊と対決することで全共闘運動を自分の中に具現していったが、わたしは、教室で、教授を告発する中で、自分の心の中に全共闘運動を培っていきたい。

（文一・H・N）